

# インド・グジャラート州における言い伝えを用いた防災教育の可能性に関する研究

村越 友祐

キーワード： 言い伝え、防災教育、気象災害

## 1. 研究の背景と目的

世界中には、数多くの言い伝えが存在している。これらの全ては、それぞれの地域で代々受け継がれ、それらの中には、科学的な根拠と正しさを持つものもある。これらの事実が意味するのは、言い伝えは、コミュニティそれ自体にとってとても大切なものであり、それ故、物理的にもまた、精神的な意味においても、地域の人々にとって身近な存在であるという事である。近年、地球温暖化の影響から、特にインドをはじめとする発展途上国での気象災害が年々深刻さを増してきている。研究の目的は、インドのグジャラート州での言い伝えを用いた防災教育の可能性を明らかにすることである。

## 2. 研究地域と手法

グジャラート州とカッチ県は、インドの災害頻発地域の一つである。カッチ県は、グジャラート州の北西に位置し、南をアラビア海に北をカッチ湿原に囲まれている。それ故、長きに渡り、サイクロン、洪水、また、地震にも見舞われてきた。研究のために、聞き取り調査が行われ、カッチ県の農家、酪農家、漁師の方々から、34個の言い伝えを集めることが出来た。また、グジャラート州の政府、学者、NGO、地域住民、学校教員の方々がインタビューに応じて下さった。アンケート、聞き取り調査の結果の分析を通して、いくつかの言い伝えには科学的根拠がある事が分かった他、グジャラート州における言い伝えと防災教育の関係が明らかとなった。政府、学者、NGO、地域住民、学校教員間の防災教育と言い伝えを含む情報の流れにおける関係性を理解することは、現在の状況をより良くする為の検討に不可欠である。実際、論文中で、2つの情報の流れに関する問題点が指摘されている。一つ目の問題は、政府から学校への言い伝えに関する情報供給が限定的である為、子供たちは、日々の生活の中で多くの言い伝えを地域の人々から学ぶにも関わらず、教員から学生への伝達は、十分でないという事である。さらに言えば、NGOは、有用な言い伝えのリストや情報を、必要に応じて、学校に提供するが、学校にはそのような情報の蓄積がない為、彼らは、学校から言い伝えに関する情報を入手する事ができないのである。二つ目の問題は、遠隔地域間の情報交換に関するものである。あるコミュニティから別のコミュニティへの情報伝達のルートは存在している。しかし、一般的に、これは、システム化されたものではなく、非公式な集会や世間話といった個人的な会話によって行われる情報交換である為、うまく普及させる事は難しいのである。

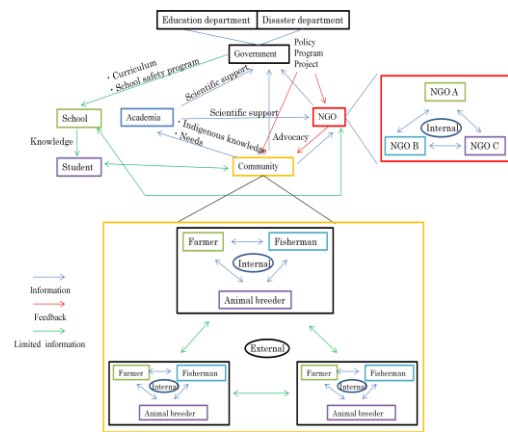


図1. 防災教育と言い伝えに関する利害関係者間の関係性

## 3. 結果

本研究を通して、天気に関する言い伝えの多くには科学的根拠がある事、植物や動物に関する言い伝えには、動植物の振る舞いと気象現象の関係を科学的に説明する事の困難さがある事が分かった。全ての言い伝えは、人々の経験と生活上への試みの蓄積である為、科学的根拠のなきものにもまた価値があるのである。そして、この場合、長期の現象の観測がその手の言い伝えの有用性を確認する為の唯一の方法である。この試みは、科学の新たな発見や科学的、技術的進歩に貢献すると思われる。